

教員は学生に自身の人生観を語る授業を設けよう!

蒲 貞行*

はじめに

誠に僭越ながら、あらためて申し上げるまでもなく「人生は、生涯学び」であり、とりわけ医療人には「命」ひいては「人間」に関する学びの心を持ち、その理解が求められている。

一方、努力の末得られた臨床検査技師資格を携え、夢と希望を持った若い技師が、学校教育と高度化した医療現場とのギャップの中で、「今自分は何をしているのか?」、「自分の使命は何か?」などと自問自答し、自分の仕事における将来への迷いを抱く場合も見受けられる。

このような状況を踏まえ、私は、「学生に人生観を語ることも教員の務めである」と考えている。これが、「いつしか若者の心の支えになる」との思いからである。今回、私なりの人生観を語る授業への取り組みについて紹介させて頂く。

I. 私の若き頃

私の母校は2年制の名古屋大学医学部附属衛生検査技師学校であり、1970年3月に卒業した。

在学中とくに印象に残っていることは、故須知泰山先生が話された「細胞検査士資格が始まった」との情報と「命を学びなさい」という三河内武丸先生の言葉であるが、当時は学園紛争の真っ直中で、私は上記検査技師学校自治会長でもあり連日否応なくいろいろな派閥の学生運動家と激論をした。それも今では無駄では無かったと振り返っている。就職後3年の間に日本と国際の細胞検

査士資格を取得した。にもかかわらず「お前に何ができる?」というある先輩の一言がきっかけで、私の魂がフルスパークした。その頃が私の人生の転機、悩める時期であった。そして私は、「揺るぎない人生観を持つ」と決心し、相当期間沈黙思考、坐禅の末、自分の未熟さ、宇宙そして人類の歩みの中での自分の使命、さらには、ふと三河内先生の言葉にも思いを巡らした。その結果、「人生とは、宇宙の歩みにおける生命現象の探究であり、そのことを通して人間性を磨くことである」という結論に辿り着き、これが今まで私を支えて来た人生哲学である。自分の人生観を教員の方々に語ることにいささか気恥ずかしさを感じるが、これも還暦の齢を越えた者の使命と思い、ここから「主張」を述べさせて頂く。

II. 患者さんは哲学者である

病院には、様々な病を背負った多くの患者さんが、検査データおよび治療と自分の症状とを日々比較しつつ「自分が何故このような病気に罹らなければならないのか」、「私の病状はどのような状態なのか」、「この先自分はどうなるのか」、「助からないとなればどのように心の整理をしたらよいのか」などと、闘病生活の中で「病気、人生、生と死、命」への洞察を深めている。

その意味で、私は、「患者さんは哲学者である」と認識している。

臨床検査技師は、もはや検査室の奥で検体検査の仕事に徹していればよいのではなく、外来や病

*群馬大学大学院保健学研究科・生体情報検査科学講座 kabasada@health.gunma-u.ac.jp

室での採血や生理検査、さらにはチーム医療の一員として患者データを共有し、積極的に発言し、また患者さんへの検査の説明を担う時代になっている。必然的に、メディカルスタッフや患者さんとの語らいの中で信頼関係を深めるベースとして、検査のスペシャリストであることと同時に「病気、人生、生と死、命」などに関する教養が求められている。

III. 国語辞書にみる「命」の語源と解釈

「命」の語源

(語源由来辞典：<http://gogen-allguide.com>)

「い：生く」「息吹く」の「い＝息」、「ち：霊」。生存の根源の霊力の意味とする説。「息の内(いのうち)」「生内(いきのうち)」などの説。「息力(いのち)」を「命」の意味とする説。

「命」の解釈

生物の生きてゆく原動力、寿命、一生、生涯。もっとも大切なもの、命ほどに大切に思うもの、真髄(広辞苑：岩波書店、2008年)。生物を生かしていく根源的力(大辞林：三省堂、1990年)。生き物を生かしている力(日本語大辞典：講談社、1989年)などと記されている。しかしながら、これらの解釈は、我々医療人にとって参考にこそなれ、巧妙で未知なる命の実態についての理解を科学的に発展させることは難しい。

IV. ミクロの世界で学んだこと

私は、細胞検査士資格を持つ臨床検査技師であることから、群馬大学では病理学、細胞診断学、検査総論(尿沈渣)、検査機器総論(顕微鏡)および細胞検査士養成コースなどを担当している。

教員となる以前(1970～2003年)、愛知県対ガン協会、愛知県がんセンター病院および愛知県総合保健センターに勤務し、その間主に細胞検査士として病理・細胞診部門に携わってきたが、異動に伴い生理検査、血液検査、一般検査や生化学検査などにも関わり、その経験が現在の技師教育に役立っている。

細胞診について言えば「標本の向こうに、結果

を待つ患者さんがいる」という教訓がある。標本は単なる物ではなく、生体から得られた貴重な情報であり、私は「生体情報は全て生命現象」とであると認識している。

私が細胞診に携わる中で学んだことはこと細胞診断学に留まらず、顕微鏡が様々な疑問の生じる泉でもあることから、「使命、生き甲斐」など人生観を深める上で深く関わってきた。

【細胞診において生命現象と理解しうる例】

細胞検査士として顕微鏡を介しがん細胞を検出する仕事、即ちミクロの世界での仕事を通してマクロの世界との結びつきを理解し、さらには「学びと人生の原点は日々の生命現象の探究にあり、そのことが命の理解にも繋がる」ものと信じ考察を蓄積してきた。

細胞診は、端的に言えば、標本中にごがん細胞が存在するかどうかをスクリーニングし、がん細胞が存在する場合、そのがん細胞の種別(腺がんか扁平上皮がんか、あるいはその他いかなるものか)を判断する検査法である。また、がんの性質として浸潤、転移、播種が3大兆候であり、リンパ節穿刺物に扁平上皮がん細胞が認められれば肺がんや食道がんからの転移が疑われる。また、腹水中に腺がん細胞が認められれば、胃がんや卵巣がんからの由来が疑われる。これらのことは健康人では見られないことであり、強調したいことは、生体にがんが発生すること、がんは浸潤、転移、播種をするという症状、リンパ節穿刺物や腹水内のがん細胞の形態が正常細胞とかけ離れた形態を示すということ、その細胞をがん細胞と認識する細胞検査士の能力・・・などなど、患者さんからの検体採取から診断に至るまでの過程に関わる一切が生命現象と言えるという点である。なお、私は「探究」という言葉に「前向きに未知なる物事を究明する」という広範な意味合いをこの一言に凝縮して用いている。

これらの考え方から、血液検査、尿検査、生化学検査、細菌学検査、生理検査など、全ての検査は生命現象としての生体情報をもとに命を測る行為、すなわち生命現象の探究と理解している。

V. 坐禅の世界とマクロの世界の遭遇

図1は「かぐや」により撮影された「月から眺めた満地球の出」である。それは45億年の歴史を持つ地球であり、そこには現在約65億人の人間が、そして870万種とも言われる生物が多様な生態系を営んでいる。この写真からは人間を始めとする生物の姿は確認できないが、もっとクローズアップすると顔かたちは分からないものの、



図1 「満地球の出」2008.4.6(日本時間)
「かぐや」がハイビジョンカメラ(望遠)で撮影
(JAXA/NHK)

多様な活動を営んでいる小さな生物の活動の様子が見えてくると想像できる。その活動の様子こそが、外見的生命現象であり、その活動産物には、自然科学的・人文科学的・社会科学的な複雑多岐にわたる広義の産物の蓄積が含まれている。そして、内面的な活動としては人間のおののが自己を探究する生命現象がある。ちなみに死について、私は人生最後の生命現象の探究ととらえているが、残念ながら誰もその体験談を語ることはできない。

VI. 宇宙での生命現象の総合が命

ここで、宇宙の彼方から地球を眺めることを想像して頂きたい。人間について言えば、新しい命は280日間母体で生まれ、誕生する。この新しい命が誕生すること、そして母体自体も新しい命を育む環境としての生命現象を担っている。今、時間を超えて全宇宙的視野から考えると、宇宙の始まりであるビッグバンが137億年前、そしてこの地球上に原始生命体が誕生したとされるのが38億年前とされている。少なくとも地球上で命が誕生する迄の宇宙の妊娠期間は約100億年であ

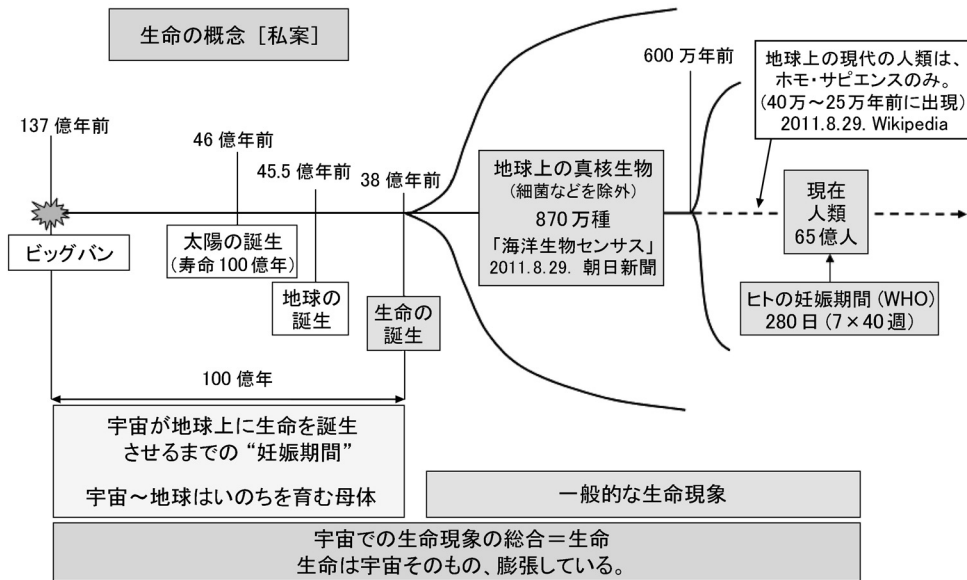


図2 2009.4.12 原図作成, 2011.8.29 一部改変.
各種新聞記事などをもとに作図(蒲)

り、宇宙も同様に命を育む環境としての生命現象を担っている。人間を構成する元素が宇宙進化の中で生まれた物質であることから、人間(地球上の生物)と宇宙が繋がっていることに間違いはない。そこで、宇宙の中で命は生まれ、宇宙での現象の全てが生命現象でありその総合が命であることから、宇宙と共に命も膨張していると理解することはできないだろうか？(図2)。とすれば、その活動産物である自然科学的・人文科学的・社会科学的な蓄積も膨張しており、一切の現象について全知全能な者は存在しないと言える。私はこれらのことから、とりわけ命の理解が求められる医療人には生涯にわたる学際的な学び、そして命に対する謙虚さと探究心が必要とされているものと理解している。

「満地球の出」は、我が人生で最も精神的に悩み苦しんだ24歳頃、坐禅で脳裏に浮かんだ宇宙から見た地球のイメージを思い出させてくれた。私にとって感動的な写真の一枚との遭遇であった。

VII. 生命現象の定義【私案】

定義:「生命現象とは、新しい命を産み、育み、命あるものによる活動とその産物」を意味する。宇宙の開闢以来、命を産み、命が育んできた、自然科学的・人文科学的・社会科学的にとらえる過去から連続として引き継がれた壮大な生命現象の膨らみがある。

私の分類する「生命現象の5領域」:

(1) 命を産み、育んできている母体・環境としての領域: 主に宇宙、地球など。

(2) 命あるもの(ここでは人類を除く生物)の生態としての領域。

(3) 命あるもの(人類)による行動と産物(広義)としての領域。

① 政治、経済、法律などに関すること。② 天文学、宇宙物理学、化学、医学、保健学などのあらゆる学問や発見の蓄積、教育に関すること。③ 資源、食料、水、エネルギーなど暮らしの基本に関すること。④ 創意工夫、開発、創造、変化などの身近な暮らしに関すること。⑤ 思想、哲学、宗教などに関すること。⑥ 自由、対等、互惠、

共生、福祉など世界平和への貢献に関すること。

(4) 人物の生き方としての領域: 芸術関係、スポーツ関係、芸能関係の人物など様々な分野で活躍しているひとの語り、教訓などの人間性の探究。

(5) 己事究明(自分にとって最も大事なこと)としての領域: 自分自身の心技体の探究。

VIII. 生命現象の視点から命を学ぶ授業: 学修原論「生命現象の探究と人生観について」の概容

「時が分別をつける」とも言われるが、私は、学生に「命と人生」について語ることで学ぶことの意義を理解し、いつしか医療人としての心の糧として役立つものと信じ「学修原論: 生命現象の探究と人生観について」(全学1年生の教養科目、全15回。2007年度より開講)を担当している。

授業の骨子は前述したごとくである。授業構成は、人生総論として「生命現象とは何か。生命現象の総合が命である。命は宇宙そのものであり膨張している。」など、パワーポイントで新聞記事を例にとりながら生命現象の概要について講義する。第3週目~9回にわたり「生命現象の5領域」に関する新聞記事を活用した演習を行い、各回の終わりに各学生が最も印象的な記事の概要を30秒でまとめてもらう。総合評価は8分程のスピーチとレポートの提出により行っている。

【評価ポイント】は、① 宇宙と生命現象(更には命)の概念が記されているか。② 授業を通しての考察、または記事から発展した課題の探究が記されているか。③ これからの人生観・座右の銘等が記されているか、などである。なお、演習に使う新聞記事は、私が大学に赴任した2004年当時より、主に2大全国紙の朝刊から「生命現象の5領域」に該当する記事を抽出し分類したもので、約2,000枚に上る。(誌面の都合上、人生総論の講義と演習で用いる代表的な新聞記事例は割愛させて頂く。)

効果: 広い視点から新聞記事の様々な事象への理解が深まる。受講当初のアンケート内容と異なり根拠を持ち自分の思いを語れるようになる。生命現象の概念に強い関心を持つ学生が現れる。

私は、学修原論での骨子をもとに、「臨床検査

総論：序論。生命現象の理解と臨床検査」(保健学科入学後最初の講義、1回)、「統合保健医療論」(保健学科全専攻2年生の講義、1回)、および「生体情報科学特別セミナー：研究を支える人生観」(大学院修士課程の講義、1回)などでも、私のメッセージとして医療人の卵達に伝えている。

IX. おわりに

以上の主張を踏まえて大学生および大学院生に伝えたいことを次に示す。

◎人生総論

人生観に生命現象探究の概念を導入することで、人生でのバックボーンができ命の理解を深める支えとなる。人生日々一切が生命現象の探究であり、探究する課題は無限である。

- ・生命現象の総合が命であり、宇宙そのものにと

らえることができる。

- ・命は宇宙とともに膨張しており、全知全能な者はいない。故に医療人は生涯学際的に生命現象を探究し、命と人間の理解を深めることである。死は人生最後の生命現象の探究である。
- ・悩むことも生きているゆえのことであり、生命現象の探究をしていると理解することである。
- ・業績だけで自分を誇ることなく、自分らしく、自分が成しうることを探究すればよい。そのことを通して人間性を磨くことこそ人生の最終課題とすることである。

◎人生各論

人生での取り組みはいかなる分野でもよい。世に貢献する使命感を持って課題(自分の道)を探究することである。それが人生各論であり、歩み続けることで夢は必ず実現する。